

想像の仲間についての深層心理学的考察

石谷真一

Summary

A Study on Imaginary Companions from the Viewpoint of the Depth Psychology

ISHITANI Shinichi

This report tried to study on imaginary companions from the viewpoint of the Depth psychology. Imaginary companions are invisible imaginary object, which children sometimes play with or talk with. In this report first, the author surveyed past studies on imaginary companions. Second, the author compared imaginary companions with stuffed objects which were found and played by children, on which he has investigated toward female university students by inquiring their favorite objects in childhood. In consequence, imaginary companions were found out to have analogy with stuffed toys, and thought to be a part of general imaginative activity in childhood.

In the latter half of this paper, the author discussed about imaginary companions in the viewpoint of the Depth psychology, especially the psychoanalytic theories and the theory of analytical psychology. Imaginary companions were considered to be symbolic expressions of children's unconscious phantasy, especially to be projection of their internal object in Kleinian psychoanalytic theory. Imaginary companions were also considered to be transitional objects in Winnicottian theory, or to be a selfobject in Kohutian theory. Furthermore, in Jungian perspective, the relation with imaginary companions were sometimes analogous with active imagination, so that it was thought to be an interaction with unconscious psyche.

In consequence of the comparative study and the theoretical study on imaginary companions, imaginary companions are thought not to be mere fantasy but an imaginative activity accompanied with unconscious. Imaginary companions are adaptive and healthy, but are often used to dissolve inner conflict, to relieve inner pain, or to facilitate ego development of children.

1. はじめに

本稿では、想像の仲間と呼ばれる幼児期から児童期に少なからず見られる現象を取り上げ、深層心理学の諸理論に照らして、その現象を考察しようとするものである。想像の仲間については後に述べるが、筆者としてはこれを足がかりにして、想像という人の精神活動について理解を深められることを期待している。筆者は、想像という精神活動は、人を人ならしめているような人間にとって極めて本質的なものではないかと考える。幼い子どもはその生活の大半を想像活動に費やしていると言っても過言ではない。青年がアイデンティティを求めて多様な実験的行為を行うのも、現実との想像的関わりと呼べるものだろう。大人においても仕事との関わりや育児において、想像力が必ずや求められていると思う。この想像について理解を深める際に、筆者は深層心理学の知見が役立つものと考えている。これについても後に詳述するが、これらの理論は人の精神活動を、意識的活動のみならず潜在的・無意識的な心の営みを考慮して、重層的に捉えていこうとする。想像といった客観的で知的のみならず、主観的で情動的な心の営みを検討するには必須の観点になるものと考えている。

そこで本稿では、まず想像の仲間について概説し、それについての先行研究を概観する。次に、筆者の児童期の想像活動に関する調査結果を提示し、想像の仲間現象を子どもの一般的な想像活動にどのように位置づけられるかを考察する。そして想像性についての深層心理学の諸見解を紹介し、それに照らして想像の仲間現象の心理学的考察を試みる。

2. 想像の仲間 ～先行研究の概観

想像の仲間 *imaginary companion*、あるいは想像の遊び友達 *imaginary playmate* と呼ばれる現象がある。これは幼児にかなり広く見られるもので、人形などの実体のあるものが何もないにもかかわらず、子どもがそこに本当に相手がいるように振舞うことである。子どもはその相手とおしゃべりしたり、一緒に遊んだりするのである。想像の仲間にはしばしば名前が付けられ、子どもはその姿や性格を明瞭に語ることもできる。時にはその姿が本当に見えたり、声が聞こえることもある。またこれらは子どもの都合のよいようにばかりは動かない面もある。それ自体が主体であり、固有の意志を持っているかのようにも行動する。このように想像の仲間は極めてリアルであるが、子どもはそれを実際の対象と混同することはない。幼児の場合、その存在は親や家族にもオープンにされるので、親はその存在を受け入れ、子どもがそれと戯れることを容認していることが多い。例えば子どもの求めに応じて、食卓に想像の仲間のための食器が用意されたりする。

想像の仲間は後述するように日本ではあまり関心を寄せられてこなかったが、米国では広く知られており、文学作品にもこれを題材にしているものが少なくない。しかし想像の仲間を心理学の研究対象とする試みはさほど隆盛ではない。想像の仲間に対する心理学的研究に先鞭を

つけたのは、ハーロック Hurlock たち (1932) とスベンセン Svendsen (1934) である。両者は対照的な方法でこの現象に迫った。ハーロックたちは高校生と大学生を対象に質問紙を使って回想法で子ども時代の想像の仲間体験を調査した。女子では3人に1人、男子でも4人に1人が想像の仲間を持っていたと答えた。一方スベンセンは、幼児をもつ母親の集まりに参加して子どもが想像の仲間を持っているかどうかを尋ね、さらに子どもにも直接インタビューして想像の仲間について尋ねたのである。スベンセンはこの研究にあたって、想像の仲間を明確に定義した。このスベンセンの定義がその後の想像の仲間研究の概念枠となっている。その定義とは、「それは目に見えない主人公で、名前がつけられており、ある一定の期間少なくとも数ヶ月の間存在し、人との会話の際にそれについて言及されたりあるいは直接の遊び相手となる。その持ち主である子どもには、それはリアルな存在である。しかし、その目に見える客観的な基礎となるものなど全く存在していない」である。この定義によって、人形などを擬人化して遊んだり、子ども自身が誰か他者を演じて遊ぶような想像遊びは、想像の仲間とは明確に区別されたのである。スベンセンの研究では、想像の仲間を持っていたのは5歳以上の子どもの13.4%であった。そしてそのほとんどが4歳前にすでに想像の仲間を持っていた。

想像の仲間に関する研究の多くは、想像の仲間を持つ子どもの特徴を明らかにしようとするものである。またそれと関連して、想像の仲間を持つことが心理的に健康なことなのか否かを検討しようとするものが見られた。これらの研究を総括するなら、女子や一人っ子、あるいは内向的な子どもに多く見られたという研究がある反面、想像の仲間をもつ子どもと持たない子どもとの間に違いは見られなかったとするものもあって、最終的な結論は見出されていない。また想像の仲間を持つ子どもは、実際の他者との関わりを拒んだり引きこもったりすることもなく、むしろ社会的で協調的な子どもであるとの研究もあり、何らかの否定的なサインとして捉える事には消極的な意見が多い。つまり想像の仲間を持つことは、米国で常識的に考えられてきたように、健康で適応的な子どもの営みの一つと見なす意見が大勢を占めている (マノセヴィッツら Manosevitz, et. al.、シンガーら Singer, D. G. et. al.、タイラー Taylor, M.)。

さて、想像の仲間に関する研究には、詳細な症例研究を基にした精神力動的研究も見られる。これらの多くは、親などの依存対象との分離といった体験に処するために、あるいは幼児期に直面する衝動や不安に対して、想像の仲間をもつことやそれと関わることがどのような意義を持っていたかを検討している。これらの症例研究の全てが症状を持った子どもを対象としているわけではないが、そうでなくとも、家庭環境に子どもが何らかの心理的対処や適応が必要な事実が生じている場合が多い。こうした臨床的研究の中で、精神分析学の見地から最初に網羅的に想像の仲間現象を検討しているのがナゲラ Nagera (1969) である。ナゲラはクリニックでの幼児観察や治療的関わりから数多くの例を挙げ、精神分析的自我心理学に基づき、想像の仲間が幼児にとって次のような役割を果たしていることを述べた。(a)超自我の補助者(b)もはや受け入れられなくなった衝動の発散の手段(c)スケープゴート(d)全能感を遷延させる試み(e)自我理想の具現(f)孤独感や無視・拒絶されたとの感情を癒すもの(g)想像上の危険を処理する手段。概してナゲラは、想像の仲間は幼い子どもの未熟な自我の保護者や援助者や緩衝役となって、

その自我の発達を促し、葛藤解決の手助けをしていると述べている。ただし、これらは子どもにとって必要とされる間のみ存在する過度的な現象であるともしている。一方、精神分析学ではあるが自我心理学の見地とは異なり、ウィニコット Winnicott, D.の移行対象やコフト Kohut, H.の自己対象の観点から、想像の仲間を捉える研究も見られる（ベンソンら Benson, R. M. et, al.）。これらは広い意味で対象関係論的思考の見地と言える。ここでは、依存対象からの分離や共感不全といった事態に対して、自己愛の傷つきの修復と健康な自己愛と自己の統合の維持のために、現実とファンタジーとの中間的な位相が求められるとされる。そして想像の仲間に対して、それが現実か否かと白黒つけない態度で見守ることが推奨される。

このように想像の仲間に対して肯定的な見方が多いが、その一方で想像の仲間現象の持つ病理的な側面に目を向けているものもないわけではない。古くはフライバーグ Fraiberg (1959) やフロイト Freud, A. (1936) らが想像の仲間の持つ適応的な機能を認めながらも、現実の対象との適度な交わりが欠け、現実と空想との境界があまりに曖昧になり、青年期以降も遷延するような場合には、病理的な側面を無視できないとしている。アダモ Adamo, S. (2004) はアスペルガー障害の青年の想像の仲間との関わりが心理療法過程を通じて変化していったことを報告している。治療開始当初の想像の仲間は極めて具象的で幻覚的とも言えるものであったが、治療者との実際的な関係の中で次第に心を開き依存することも可能になるに連れ、小説の中の登場人物といった想像的なものに限定されるようになっていったというのである。そしてクライン派の観点から、想像の仲間が、当人が直面できないでいた情緒的苦痛から身を守る防壁として作用した反面、良い対象との実際的な内的な依存的関係を構築することを阻む防衛組織になりかねないことを述べている。アダモの研究から、想像の仲間現象は健康で適応的な心の営みにも、また病理的で防衛的な営みにも用いられることが明瞭になったと言えるだろう。健康でさしたる臨床的問題を持たない子供を対象にこの現象を見ていくならば当然適応的で発達促進的な側面が強調されるだろうし、反対に深刻な病理をもつ患者の想像の仲間現象は防衛的、逃避的な色彩の濃いものとなるだろう。本稿では想像の仲間の病理的使用という側面のあることには留意しながらも、健康で通常の側面を中心にみていくことにする。

想像の仲間は日本では米国ほど広く知られてはいないと先述したが、日本における研究は以下の二つである。まず、わが国において初めて大規模に想像の仲間体験を調べたのが大塚ら (1991) による調査研究である。大学生1,013人を対象にしたところ、その出現率は男子6.0% 女子12.8%と、女子が男子の約2倍となった。また体育学部2.0%、理科系学部6.1%に対して文科系学部が13.1%と高率であった。想像の仲間の出現の契機は特に意識されていないことが多く、その年齢は5, 6歳と10歳にピークがあり、また消失時は幅広く、今なお存在するとする者も18名いた。これは想像の仲間を持ったと答えた者の2割にあたる。想像の仲間はほとんどが人間で、友達や同胞と位置づけられ、優しさや共感、愛着、あるいは好奇心や尊敬の念を覚えると答えていた。また想像の仲間が果たす役割は、話を聴き理解し支えてくれる存在や理想的な人物、あるいは淋しさを埋めてくれる遊び仲間などであった。そして想像の仲間を持つ者のうち4人に1人から3人に1人が、声を聞いたり目に見えたりと強い実在感を感じて

いた。そして想像の仲間のことはほとんどが他者には語られず秘密にされていた。

麻生（1991）も女子大生215名を対象に想像の仲間の有無を調査し、37名（17.2%）がこうした対象を持っていたことがわかった。そのほとんどが小学校あるいは中学校時代に体験していたものであるという。麻生（1989）はこうして得られた想像の仲間をその内容からいくつかのタイプに分類を試みている。それによると、もっとも典型的な想像の仲間は「秘密の友達」タイプで、遊び相手や相談相手、よき理解者や忠告者などで全体の過半数がこれに当てはまったという。「秘密の友達」と似ているものに「もう1人の私」タイプがある。これは本人の内部に潜んでいたり本人と瓜二つであったり、本人と同一の名前をもつなどの場合である。この二つのタイプに想像の仲間現象の3分の2が含まれるという。少数ながら以下に示すような他の想像の仲間のタイプも見出された。「白昼夢・ドラマ」タイプや「メルヘン・妖精」タイプは、他者的な人格が半ば実体化してイメージされているだけでなく、その人物を取り巻く状況までイメージされて物語が生み出され、本人がドラマの世界の中にいるかのような状態になっているものである。さらに少数だが「神様・保護者」タイプや「妖怪・怪人」タイプも見出された。これは米国の研究では一般的に想像の仲間を含めない。しかし麻生はこれらも想像の仲間に加えてはどうかと述べている。最後に「実在の人物」タイプや「亡き人」タイプは、実在する（した）人物が想像の仲間である。「亡き人」タイプなどは老年期に伴侶や子どもに先立たれた人には少なからず見出されるものかもしれない。このように想像の仲間の具体的内容に注目して分類している研究はほとんどない。そして想像の仲間現象が、白昼夢様の体験にも宗教的体験にもあるいは死者を悼む体験にもつながる、ことのほか幅広い想像的活動であることが認識されるであろう。

想像の仲間現象はまた、発達的に推移していく側面もあるだろう。麻生（1996）は幼児期、児童期、思春期・青年期、老年期の想像の仲間現象の特徴を挙げている。ただ麻生の記述は想像の仲間のもつ機能にはさほど言及していない。そこで次に、麻生の記述を下敷きに、これまでの研究成果を網羅した、典型的な想像の仲間の発達時期による特徴を筆者なりにまとめてみた。まず幼児期の想像の仲間は、家族にもオープンにされるので、客観的にも観察される現象であることが多い。その際、想像の仲間は人形などの実在物と同様に遊びの対象であり、自分のコントロール下に置かれていることも少なくないように思われる。つまり自分が作り出したことが心の隅では意識されており、外的現実と混同されることはない。またナゲラが心理力動的見地から明らかにしているように、幼児期の想像の仲間は、まだ無力で十分に外界や自分の衝動を制御できない自我を庇護し、自我のモデルになるような存在であることも多い。そして自我の機能が次第に拡大し、想像の仲間が果たしていた役割を自我自身が果たせるようになれば姿を消していく過度的な存在であることがしばしばである。想像の仲間との間には数々の遊びが生じるが、その遊びを通して幼児は内的葛藤を解消したり、自我の発達課題に取り組んでいくとも考えられる。この幼児期の想像の仲間が代表的な想像の仲間と言えるが、幼児期健忘ゆえに後年回想されることは少ない。青年や成人の回想から語られる想像の仲間は次に述べる児童期以降のそれである。児童期の想像の仲間も日常的な存在で、遊び相手、対話相手である。

他人に語られることはあまりないが、そうした体験を持つことに不安を感じることもない。それは他人には見えない自分だけのパートナーであり、寂しさを埋め合わせ、退屈から救い出し、楽しい気分にしてくれる存在である。想像の仲間との交流は外的現実の対象（他者）との交流からひと時身を引いた時に現れる空想であり、外界現実との関わりとは別に楽しまれる。思春期・青年期になれば、想像の仲間は誰にも明かさない秘密（個人的世界）の共有者、理解者となり、独自の内面世界を抱える孤独を癒してくれる内なる親友ともなる。現実にも何でも話せる親友ができると消失することも多く、親密な他者の代わりに自己愛や自己評価のバランスを維持する機能を果たす。日記を書くことを契機に想像の仲間が生じることもあるように、内省を促し、自己の統合を促進する機能も果たすと考えられる。ただ想像の仲間があまりに実在感をもつと、異常なことではないかと内心不安を抱くことも見られる。このように想像の仲間は発達的に推移していく面があるので、どの時期の現象を主に考えるかで、想像の仲間についての議論に齟齬が生じる可能性もあろう。本稿は子どもの想像的活動について検討しようとしているので、幼児期から児童期にかけての想像の仲間を念頭において議論を進めることとする。

ところで想像の仲間とは、人形などの実体のあるものがないにもかかわらず、想像上の相手を生み出して関わりを持つ現象を中核としている。スベンセンの定義にもあるように目に見えないものが何よりの特徴と言える。しかしながら、想像の仲間は何も手がかりのないところから生み出されるとは限らない。大塚らの研究でも、物語や映画、中には夢を見て、その登場人物が想像の仲間になる場合が報告されているし、麻生のタイプの幾つかでは明らかに基になった対象を特定できるものがある。想像の仲間について一冊の著書をものにしていないタイラー Taylor, M.(1999) も、目に見えないものとの関わりを、人形やおもちゃといった実在するものとの関わりから峻別することは困難であるとしている。そして幾つもの研究で、想像の仲間現象に後者の現象を含みこんで考察されていることを挙げている。そのような場合、想像の仲間現象をもつ人の割合はスベンセンの研究の数倍に上り、過半数の者が何らかの想像の仲間を体験していることになったと述べている。我々心理臨床に従事する者なら子どもとの遊戯療法の体験を思い起こすとよい。子どもはいろんなおもちゃに自分の思いを託して想像的に遊ぶが、同時に遊びの過程でおもちゃにとらわれずに自由に想像を膨らまして対象を創造し、その対象をあたかも実在するかのごとく扱うことをセラピストにも求めてくる。セラピストは実在するおもちゃであろうと創造された空想上の対象であろうと、ともに子どもの心の一端を表現するストーリーとして尊重する。おもちゃが使われようとなかろうとその価値が減ることはない。このように想像の仲間現象の主観的に体験されている側面を検討すると、実在物との想像的関わりとの間に連続性を認めざるを得ないのである。

本稿では、想像の仲間現象をスベンセンの定義に従い目に見えないものとの関わりに限定するが、上述したように想像の仲間現象を子どもの想像活動の中にどう位置づけるかという問題が解決されているとは言えない現状がある。そこで次に、筆者が授業の中で行った子ども時代の想像活動の調査結果の分析を報告し、想像の仲間現象との異同を検討する。それによって想像の仲間現象が子どもの一般的な想像活動とどの程度共通点を持ち、どの部分で特異なものか

を考えてみたい。

3. 児童期の想像活動についての調査と想像の仲間との比較考察

児童期に夢中になって遊んだ事物との想像的かわりについて、以下のような説明を提示し、本学の学生に質問に対する自由記述を求めた。「子どもの頃（主に小学生の頃）、とても気に入った持ち物やよく遊んだおもちゃ、あるいはとても大切にしていた物や生き物がいませんでしたか？ または大好きな場所や人がいたかもしれません。あなたはそういった物（あるいは人や生き物）との関わりに夢中になったり、それがとても大切な時間だったりしたのではないのでしょうか？」。質問は以下の4つである。(1)子どもの頃、お気に入りだった物や生き物、あるいは場所や人がいましたか？ そうしたものがあったならどんなものだったかを述べてください。(2)お気に入りの（大切な）ものとはどんなふうに関わっていましたか？ (3)それと関わっているとあなたはどんな気持ちになったのでしょうか？ それはどんな体験だったのでしょうか？ (4)それとはどんなふうに分れて（別れて）いったのでしょうか？ 授業時間を利用して受講生66名（2～4年生）に質問を載せた調査用紙を配布し記入させた。所要時間は10～20分ほどであった。65名が何らかのお気に入りのものについて回答した。

それでは結果を紹介しよう。まず、質問(1)にあったお気に入りのものについては、説明文によって例示したように多様なものが述べられていたが、次の5つに大別された。①ぬいぐるみや人形、毛布といった肌身離さず持ち歩いていたもの、23名（35.4%）。②それで繰り返し遊んだおもちゃやコレクション、21名（32.3%）。③ペットなどの動物、14名（21.5%）。④遊び場やお気に入りの空間、11名（16.9%）。⑤祖父母や友人などの人物、9名（13.8%）。(ただし複数回答を含む) このように今回の調査では想像の仲間は全く現れなかった。これは上記のように例を挙げて尋ねており、その例に想像の仲間が含まれなかったこと、さらに小学生の頃を思い浮かべるように指示したことで想像の仲間が現れやすい幼児期に注意を促さなかったことなどによっても考えられる。次に質問(2)のお気に入りのものとの関わりについては、次のように分類できた。上記の①～③については以下に示す5つに分類可能であった。(a)どこに行くのも一緒といった具合に携帯して持ち歩く随伴的関わり、23名（35.4%）。(b)場面やストーリーを想像し思うままに演出する遊戯的関わり、17名（26.2%）。(c)それを扱うことや使いこなすこと、それを用いてやり遂げることに夢中になる道具的関わり、13名（20%）。(d)それを人格を備えたものと見なし、それに語りかけたり、兄弟姉妹や分身のように感じる対話的関わり、12名（18.5%）。(e)それをお世話する対象と見なし、自らはその親的存在と見なす養護的関わり、11名（16.9%）。(やはり複数回答を含む) 一方、④⑤については、その場所に行くことや居ることという関わり、またその人と一緒にいて交流するという関わりであった。質問(3)のどんな体験であったかについては、以下の4つにほぼ分類できた。i 安心する、落ち着くといった癒し、31名（47.7%）。ii わくわくする、満足したといった楽しみ、31名（47.7%）。iii 愛情を感じる、愛着を覚えるといった好ましさ、19名（29.2%）。iv 自分を理解してくれているという理解者、4名（6.2%）。

最後に、質問(4)のそれとの別れは、実に多様で分類は困難であった。自らの決断で処分したり決別した場合もあったが、自然と興味や関心が薄れていくことも多かった。ただし、ぬいぐるみや人形などの場合、以前のような重要度は薄れても今なお所持し続けていると報告している者もあった。

これらの結果から次のようなことがわかる。お気に入りのものとの関わりやそれとの体験はおおよそ2種類に分かれるのではなかろうか。一つは人形やぬいぐるみなどを対象とし、それらを随伴し、場合によっては対話したり世話を焼いたりして、安心や癒しを体験する。またそれらに強い愛着や愛情を感じるといったパターンである。時には対話を通して自分にとってかけがえのない理解者にもなったりする。これらは愛着を覚える対象であったり、「心の友」とでも呼べる対象である。対象者の過半数が報告したお気に入りの対象がこれに相当しよう。もう一つは、人形やその他のおもちゃを用いて想像を働かせて遊んだり、おもちゃを扱うことに夢中になって、楽しみや満足を覚えるといったパターンである。こちらは常識的な意味で、おもちゃで遊ぶという事象に相当しよう。これも対象者の半数近くいた。まさに遊戯の対象である。他に、動物をお気に入りの対象とした者や実在の人物との関わりを挙げた者がいたが、それらの体験は前者に近く、お気に入りの場所を挙げた者は後者の体験に近かったと思われる。よってお気に入りのものとは、愛着対象あるいは「心の友」的対象と、遊戯的对象とに二分できるものであった。

この分析を先の想像の仲間との関わりと比較してみると以下のように考えられるのではなかろうか。大塚や麻生の研究から想像の仲間との関わりの中核となっているのは、友達や同胞と位置付けられ、優しさや支持、理解を示してくれるものであった。したがって、本調査で得られた二つのパターンのうち、愛着対象あるいは「心の友」的対象との関わりに極めて近いと思われる。両者を分けているのは、実在して目に見えて手に触れることが可能な対象が存在するか否かであるが、心理的体験としてはほぼ同様であると言えそうである。ただ、本調査で多く見られたぬいぐるみや毛布といった肌身離さず持ち歩いてきたもの(①に相等)には、想像の仲間のように人格化されていないものも含まれる。これらは後述するウィニコット Winicott, D.の移行対象 transitional object に相当する対象物と思われる。これらの対象が名前をつけられ、人格が付与され、対話的な関わりが生じてくれば、想像の仲間との体験に等しいものになるだろうと考え、「心の友」的対象の先駆態としての意味をこめてここに含めたのである。一方、本調査のもう一つのタイプ、遊戯的对象との関わりには、おもちゃを介して想像の世界が噴出し、その世界に我を忘れて遊ぶような場合が含まれる(このタイプは厳密には、(b)遊戯的関わりと(c)道具的関わりの二つの関わりが含まれており、ここでは前者が相当する)。これは、麻生が想像の仲間の分類で挙げた「白昼夢・ドラマ」タイプや「メルヘン・妖精」タイプと近い体験をしているのではないかと思われる。これらは覚醒しながら夢を見ているような体験に近い。これも想像の仲間の一つのありようだと考えるのなら、やはり想像の仲間と実在物との想像的関わりでの体験とには共通性があるように思われる。つまり想像の仲間にも実在物との想像的関わりにも共通して二つの関わり、二つの心理的体験が見出せるようである。すなわち、

前者は支持や理解によって心の痛みの緩和や安寧がもたらされる関係の体験であり、後者は空想が触発され空想世界での遊戯から楽しさや満足をもたらされる夢幻様の体験と呼べそうである。

以上、今回の調査結果を想像の仲間についての先行研究と比較・検討した。想像の仲間と実在物との想像的関わりとには、やはり共通性や連続性が強く見られるというものであった。実在物との関わりを子どもの想像活動の一般的なあり方と見るなら、想像の仲間現象は、目に見える実在物がないという点で異なるが、主観的な体験や果たしている心理的役割といった点では一般的な想像活動と大きく異なる点はないと考えられる。それでは次に、想像の仲間現象が精神分析学や分析心理学などの深層心理学の観点からどのように捉えられるものかを検討する。症例を通じて一つの理論的立場から想像の仲間を考察している研究は幾つも見られるが、幾つもの理論的枠組みを比較しながら想像の仲間を検討している研究はあまり見られない。異なる理論的見地からは想像の仲間の異なる側面が明らかになることが期待される。

4. 想像の仲間に関する深層心理学的考察

(1) 内的対象の象徴としての想像の仲間

まず、精神分析学の見地から想像の仲間という現象をどのように理解できるか考察したい。精神分析学は現代、創始者フロイト Freud, S.の心の理解や技法から大きな発展を見せ、フロイトの立場に留まる古典的なもの他に、自我心理学、対象関係論、自己心理学といった学派が展開している。ここでは対象関係論の立場からクライン派の理論とウニコットらの中間派の理論を取り上げる。また自己心理学の立場からの考察も試みる。自我心理学については、すでにナゲラらの想像の仲間についての見解を紹介したのでここで再述することはしないが、この立場から想像の仲間がどう捉えられるかを簡単にまとめておく。

自我心理学とは、衝動や不安といった内的なものや対人関係といった外的なものに処していく対処機能としての自我の機能に注目し、その発達や病理のメカニズムを解明しようとする学派である。そして想像の仲間は幼児にとって、自我発達や人格の構造化の過程で出現する過度的な媒体物であって、自我の発達や人格の構造化を促進する機能を果たしている。想像の仲間は、自我による自我のための想像的創造物である。幼児が扱う人形やぬいぐるみといった具体物と想像の仲間との間に顕著な相違はなく、いずれにせよそれらと関わりそれらで遊ぶこと自体が発達促進的なのである。ただし自我心理学の想像の仲間に関する文献は幼少の児童のものに限られており、児童期から思春期青年期にかけての想像の仲間を分析したものは乏しい。自我心理学においては児童期を心的構造化の比較的安定した潜伏期、思春期青年期を自我の再統合の第二の個体化期と見るが、この時期の想像の仲間もまたこうした発達の促進的機能を果たしていると考えられるのかどうかは検討を要する問題である。

フロイトは無意識の働きを強調し、それを生物的本能に起因する欲動に結びつけたが、無意識の力動のいっそうの解明がクライン Klein, M.に始まるクライン派によって取り組まれてきた。アイザックス Isaacs, S.(1948) は生物学的本能が無意識の空想（この空想は通常 phantasy

と綴られる。これは意識的空想 *fantasy* との区別を意識してのことである) を生み出しているとし、無意識的空想を強調した。無意識的空想とは生の本能あるいは死の本能の精神的な表象物である。誕生間もない乳児の空想は、身体的・感覚的体験を解釈しそれに意味を与える役割を果たす。つまり空想なくしては経験は意味を持たない。しかし空想はたちまち複雑化し、願望充足や不安の内容物だけでなく防衛ともなっていく。この無意識的空想は当人にはほとんど意識されることはないが、精神にも身体にもつまり我々が生きることにも多大な影響を与えている。症状や性格やパーソナリティの背後には必ずそれらを決定している優勢な無意識的空想がある。ちなみに夢は無意識的空想の表現の一つである。精神分析はこの空想を夢や自由連想の分析、また子どもの場合には遊戯の分析、そして何より分析場面で生じる転移現象を通して読み取り解釈して返す。この解釈によって無意識的空想は変容し、それが症状やパーソナリティの変容をもたらすと考える。これが空想の側面から見た精神分析療法の治療機序である。

さて、無意識的空想の内容とは内的対象関係である。我々の無意識には様々な対象があり、それが自己と関係を持っている。対象は無意識界において他者や事物に相当する。自己は対象によって支えられ生かされることもあれば、虐げられ貧困化することもある。この自己と対象との関係が内的対象関係である。したがってどのような内的対象が無意識にあって如何なる対象関係が営まれているかが無意識的空想の中身なのである。

ところで無意識的空想と現実との関係はどうなっているのだろうか。まず、精神分析では無意識的空想もリアリティを持つとして一つの現実、すなわち心的(あるいは内的)現実と見なす。そこでここで言う事実的な現実とは、外的現実と呼ばれる。よってこの関係は内的現実と外的現実との関係でもある。二つの現実とは分離して認識されるわけではない。クライン派の理論では、無意識的空想が一次的で、外的現実とは乳児の知覚能力の発達の伴い次第に認識されていく。その際、無意識的空想は外的現実を意味づける参照枠、仮説となる。空想なくしては外界は意味を持たない。乳児は(そして大人でも)空想をもとに外的現実を吟味していく。しかし外的現実とは空想のおりではない。ここで空想と外的現実との相互作用が生じる。つまり空想は変容されていく。これが無意識的空想の発達である。この相互作用を通じて無意識的空想は次第に外的現実に近いものになっていく。この過程をクライン派では心的態勢が妄想分裂ポジションから抑うつポジションへと次第に移行していくこととして捉えている。この相互作用の如何、また二つのポジションの移行は、精神病理の種類によって変化する。ここでは健康な心の発達を概観している。

外的現実とはただ認識されるばかりでなく、それに大いに関心が注がれ、関わりが持たれ取り組まれる。これをリビドーが備給されるとも表現するが、このとき外的現実の対象は無意識的空想の象徴となっている。クライン派のスイーガル Segal, H. (1991) はこの象徴形成について考察を深めた。象徴形成が適切なものであるとき、象徴されるものと象徴とは明確に区別される。そこで象徴を用いること自体に不安や罪悪感を感じることはない。象徴されるものとの間では満たされることのない欲求が、象徴を用いることで満たされる。あるいは象徴されるものとの間にある内的葛藤が、外的な象徴との関わりを通して探求され、葛藤の解決が模索される

こともある。つまり象徴を用いる能力は心の健康と発達に欠かせないものである。しかし象徴を用いる能力もまた発達の産物である。上記の象徴形成は心が抑うつポジションで主に作動してこそ可能になる。妄想分裂ポジションでは象徴と象徴されるものが等式でつながれる象徴等式 (symbolic equation, 象徴的等置とも訳される) となる。そこでは象徴されるものが引き起こす不安や罪悪感のために象徴を用いることが阻まれてしまう。ここでの議論にひきつけるなら、遊びは象徴を用いる能力が確保されていて初めて、無意識的空想を表現するのであり、治療の素材に用いられる。象徴等式に至っては遊ぶことができない。また象徴の形成と使用は伝達能力を示してもいる。我々は象徴なくして他者とコミュニケーションを持つことはできない。さらに象徴は他者とのコミュニケーション、すなわち外的世界との伝達ばかりでなく、内的な伝達にも必要である。象徴のおかげで我々は自らの無意識的空想と交流を持つことができるのである。意識的には自分の衝動や感情についての自覚が高いことを意味するが、これらの人は無意識的空想の象徴表現をうまく用いることができるのである。このように象徴を用いて自分自身と伝達しあう能力は言語的思考の基礎となる。言語的思考はこのような内的伝達の一つのあり方と言える。

最後に、無意識的空想と白昼夢、そして遊びあるいは想像との関係を見ておこう。これが本論で議論している想像の仲間や実在物との想像的関わりを如何に考えるかと関連する。スィーガルは遊びと白昼夢とを区別する。ここで言う白昼夢とはおおよそ意識的空想 fantasy のことである。スィーガルによれば、遊びとは無意識的空想を現実へと翻訳しようという試みであり、現実を探求し、現実を征服する方法でもある。遊びとは無意識的空想、中でも葛藤を徹底操作する主な方法である。そして自由に遊ぶ能力は上述した象徴を用いる能力に依存する。スィーガルは、子どもの遊びは無意識的空想と現実との間に象徴的結合を作る最も重要な方法であるという、クラインの見解を紹介している。夢は空想の問題に対する空想の解決しかもたらさないのに対して、遊びは現実との重要な結合を作る点が異なるのである。しかし象徴機能が妨げられておれば、遊ぶ能力は制止に至ることがある。遊びに精神病的不安が侵入すると遊びは放棄されるか、そうでなくとも強迫的、硬直的そして反復的になりやすい。一方白昼夢は、遊びや夢と違って内的現実やそこでの葛藤を無視した、全能的な願望充足である。白昼夢はしばしば反復的で浅薄で、常に自己中心的である。白昼夢すなわち意識的空想と想像との違いを、スィーガルは「かのような (as-if)」と「ならばどうなる (what-if)」の違いとして明確にしている。上述した遊びは想像に相当すると思われるが、想像では全能性と自己中心性を放棄して現実に直面する。つまり多少なりとも抑うつ態勢の水準で機能することが前提となる。想像力とは「かのような」世界を生産するために現実を否定することではなく、むしろ可能性を探求するのである。ただし白昼夢と想像とを峻別するのは困難でもある。時に白昼夢は想像の始まりでもある。白昼夢は健康な人にも見られるが、やがて現実検討に委ねられ、現実と対立するなら放棄されたり修正される。つまり「かのような」から「ならばどうなる」へと移行し、それに堪えられた白昼夢はもはや想像と言うべきなのであろう。

それでは次に、上述したクライン派の見解に照らして、本論で検討している想像の仲間現象

をどのように理解できるか検討しよう。まず、想像の仲間とはその定義にもあるように実体のない対象である。その面では白昼夢や意識的空想との類似性を感じさせる。たしかに想像の仲間には願望充足をもたらす側面もあるだろう。しかし想像の仲間がリアルに感じられ一定の間保持され、それと頻繁に関われるからには、それ相応の内的必然性があることと思われる。つまり無意識的空想が想像の仲間が生じる背景に働いていると考えられる。クライン派の理論では我々は皆内的対象を持ち、それらとの間に様々な対象関係を営んでいることで、情動的体験が成り立っていると考えるが、想像の仲間をこの内的対象の象徴、内的対象が投影されたイマージと見なすことができるのではなかろうか。イマージとは人物像や人物イメージである。よって想像の仲間との関わりは内的対象関係の一端を表現していることになる。こうしたことは一般的には、人形やおもちゃを用いた遊びに表現されるが、想像の仲間現象では実在物を介さない想像として生じると言えるだろう。ところで想像の仲間は当人にとって肯定的な存在であり、楽しみや慰めなどをもたらす。この点は、想像の仲間によって象徴されている内的対象が良い対象であることとして理解されるだろう。良い対象との関係が優勢な無意識的空想が健康な心の営みをもたらすとクライン派は考える。病理を抱えた心ではそうはいかない。内的対象が自己に対して懲罰的、侮蔑的、あるいは迫害的、搾取的に振舞うような悪い対象であることが多い。そのためこのような対象が具象化されたイマージは当人を追い詰め苦しめる。筆者はかつて、自分のすること考えること全てをけなし罵倒し、意欲をそぐような内なる声に支配されて、自発的で創造的な営みが極度に制限されたクライアントに出会った。そのクライアントの場合も心の中に対話的他者がいる点では想像の仲間と同様であるが、その関わりの方とそれが当人に及ぼす影響は正反対である。このような他者は悪い内的対象が象徴化されたイマージである。しかし想像の仲間には当人に対し否定的に働くものを含めはしないようである。以上のようにクライン派精神分析の見地からは、想像の仲間現象は内的対象関係の象徴的表現であり、しかも良い対象との関係が無意識的幻想で優勢に働いていて生じるものと考えられる。内的対象の性質によっては、当人に対して否定的に機能する想像の仲間もありうることになる。

(2) 移行対象と移行領域から見た想像の仲間

無意識的空想（内的現実）と外的現実との関係について、クライン派とはやや異なる見解を述べているウィニコットの独立派の精神分析家の理論から、想像の仲間やお気に入りのものとの関わりを検討してみよう。ウィニコットやライクロフト、そしてミルナーらの見解は以前にまとめている（石谷2004）が、ウィニコットの移行対象の理論に絞って再記載しておこう。ウィニコットの見解のクライン派と異なる点は、内的現実でも外的現実でもない第三の体験領域を提唱したところにある。それが移行領域、あるいは中間領域、または可能性空間とも呼ばれるものである。ウィニコットはその由来を母子関係に基づいて次のように述べている。誕生間もない乳児をかかえる母親は育児に没頭することで乳児のニードにはほぼ適切に応えることができる。このとき乳児は自らの身体的欲求に基づき対象を創造する。もちろんこれは乳児の主観的な空想に過ぎないが、そのとき実際に、母親によって欲求の充足が行われる。授乳を例に

挙げるなら、乳児が乳房を主観的对象として創造したときに、実際に乳房が差し出されるのである。ここに乳児の空想は現実のものとなる。それによって乳児はあたかも自分が創造した乳房から乳を飲むという万能的体験を享受する。こうした体験が繰り返されると、乳児は外界にある対象を単に外的現実として、つまり自分にとって異物として反応するのではなく、自らが創造したものとして関わりをもつ。すなわち、外的現実の対象（外界対象）は乳児の万能感の延長上に置かれることになる。外界対象は主観的对象を象徴するものであり、そのように扱われる。これが移行対象である。代表的な移行対象は、幼い幼児が入眠時などに肌身離さず持ち歩く毛布やぬいぐるみといったものである。これらは母親との分離という場面において、母親代わりになって分離の痛みを和らげ分離を否定してくれる、母親の象徴である。このようにして外界現実と関わっていく乳児は創造的に生を営むことができる。その対極にあるのは外界への服従である。このとき、外界に反応する偽りの自己が形成されるが、外界との関わりに主観的な裏づけがないので空虚感が伴うことになる。

移行対象は無意識的空想という内的現実と、他者と共有される事象的現実である外的現実との間にある、中間的な経験の領域で次々と生み出され楽しめる。移行対象とのかかわりがもたれる領域が先述した移行領域であり可能性空間である。子供の遊ぶことも移行領域での体験である。おもちゃは移行対象であり、無意識的空想に由来する様々な事象が演じられ享受される。夢中になって遊ぶ子供は移行領域の住人である。子供の遊ぶことに相当する大人の体験は創造的な仕事などに没頭することである。このように移行領域での体験は子供のものばかりではない。実際、移行領域は人間の宗教や文化にかかわる領域全般に広がっていく。移行領域を持つとは、我々が外的現実に対し、単に客観的、合理的に処しているに留まらず、絶えず想像的に関わっていることを示し、創造的に生きることを意味する。したがって移行対象をもつことは基本的に健康な心の営みである。移行領域を経験できる能力は、発達早期の母子関係のあり様の相違に応じて個人差が大きいとウィニコットは言う。そもそも移行対象が存在するためには程良い内的対象が必要である。内的現実 こうした対象が存在しなければ、その象徴的実現である移行対象は意味を持たなくなる。しかしほど良い内的対象が存在するためには、実際にほど良い対象が実在し経験されていなければならないともウィニコットは述べている。このように移行対象の理論は外的現実としての良い対象の意義を強調する。外的現実、クライン派の強調するような無意識的空想を枠付け修正する役割ばかりでなく、むしろ空想の性質を左右し、われわれの体験の様式を形作るものなのである。

今回、お気に入りのものに関する調査で過半数を占めた、ぬいぐるみや人形などを随伴しそれらから安心や癒しが得られるという体験は、移行対象とのかかわりや移行対象の機能に適合する。無生物ではなく動物や人物であっても、それとのかかわりが同様の心理的体験をもたらしている場合、それらも移行対象の一種と考えて差し支えないと思う。このように実在物との関わりでは児童期に移行現象が広く見られるのである。一方、想像の仲間はどうかであろうか。大塚らの研究に見られたように児童期の想像の仲間の果たしている心理的な役割は、自己を理解し、支持し、癒すものであって、このような機能は移行対象のそれに極めて近い。児童期に

広く移行現象が見られることも上述したとおりである。しからば想像の仲間も移行現象と類似のものを見て差し支えないのではと思う。幼児期同様児童期においても、外的現実との関係の中で様々な危機に見舞われ、その際現実との緩衝材としても想像の仲間が創作されるのではないだろうか。しかし幼児期の想像の仲間については異なる面があろう。ナゲラの幼児を対象とした研究にあったように、想像の仲間は自我の多様なニードに基づいて利用されるものであり、全てを移行対象と見なすのは誤りと思われるからである。このように発達時期別に想像の仲間の機能を考察する必要があるように思われる。

(3) 自己対象と想像の仲間

想像の仲間を精神分析学の知見と比較する際に、もう一つ見落とせない重要な概念がある。Kohut, H.によって提唱され、現代米国を中心に一大勢力となっている精神分析的自己心理学における自己対象という概念である。自己心理学はその名のとおり自己を心の発達と病理を理解する中心にすえる。自己とは実体のないしかし経験的には極めて有効な概念である。我々が健康であるとき、すなわち抑うつ的でなく幸福を感じ、意欲に満ち、自分がまとまっていると思うとき、自己が凝集していると考える。これは憂鬱になったり、気もそぞろになったり、空虚を感じたり、未来に対する希望が失われるといった状態、すなわち断片化した自己とは対極的な状態である。しかし自己が凝集していたり、断片化したりするのは、その自己に対して環境がどのような働きをしているかによるところが大きい。特に発達早期や治療場面ではそうである。自己に対して環境が適切に照らし返し支持を与えることができるなら自己の凝集性は高まるであろう。ところが環境の照らし返しが弱体化すればするほど自己が断片化しやすくなる。こうした環境の果たす機能を自己の側から主観的な体験として捉えた際、自己対象(体験)という言葉を用いる。自己対象とは、比喩的に言えば、人を包み込んでいる空気のようなものである。それがあるときにはことさらに気づくものではない。なくなって初めてその重要さに気づくのである。

自己対象の機能を果たすのは発達早期においては養育者である。幼児は自己対象のニードを満たすべく強い欲求を養育者に向ける。それは自己が承認され確かなものとして認識されたいという欲求、特に自己を表現した際にそれが受け入れられ評価されたいという映し返しへの欲求。それに自分自身を、賞賛し尊敬している自己対象の一部として体験したい欲求、すなわち安定し不安のない力強く賢く保護的な自己対象に溶け込みその一部となってそこから自分にはないそうした属性を手に入れたらいいという、理想化の欲求である。この二つの欲求ともって生まれた資質や学習され獲得する技能によって自己はまとまりを得て拡張していく、すなわち成長を続けていくのである。しかし自己対象機能はたちまち複雑化し、上述した幼児的な(あるいは後年大人になって現れた際には蒼古的なともいう)自己対象欲求は、間接的で象徴的なものへと成熟していく。自己対象欲求も上述した映し返しと理想化のほかに、分身への欲求、対立への欲求、効力感の欲求などが新たに生じてくると考えられている。

自己心理学では精神病から神経症に至る多様な心の病は、それぞれ多様な自己の損傷として

捉え直される。それは自己の断片化の多様なあり方であり、そうした自己を守ろうとして組織された防衛なのである。そして断片化に至ってしまったのは、様々な自己対象体験の障害があったからだと考える。そこで治療は自己を修復することであり、そのために適切な自己対象体験をもつことで、自己対象機能を再度内在化していくことである。治療場面で生じてくる転移という現象も、この自己対象への欲求の顕在化として、つまり自己対象転移として捉え直される。

このように自己心理学では、自己を支え維持する上で、自己対象機能と言う心理的な機能が不可欠であると考えられる。それは成熟した大人においては、幼児のように直接身近な人物に向けられる程度は少なくなりはするけれど、全く他者という環境を必要としないというわけではないと考える。ただし成熟した大人であれば、その他にも、宗教や芸術やその他様々な趣味の世界に、自己の損傷を癒し自己の凝集性を回復してくれる対象を見出すことが可能になる。こうした間接的な自己対象機能が豊かにあるほど自己は幾重にも守られ支えられているわけで、これが健康で望ましい自己のあり方といえるのであろう。ところで自己対象機能は上述した映し返しと理想化が代表的なものであるが、潜伏期以降に現れてくるものに分身自己対象がある。端的に言えば、分身を求める欲求である。自分の分身といえる他者によって自分が理解されたり、その分身と自分とが似ていたり、親密であることによって、自己の凝集性を高めることが期待される。これは一般的には自分の同類、友人や同胞を求め、それとの親しい交わりを期待する関係への希求として表されると思われる。そして想像の仲間も、その位置づけやそれがもたらす心理的な効果を考えると、このような分身自己対象としての役割を果たしていると考えられることができるだろう。自己心理学においても、分身自己対象との関係は、発達的には想像の仲間というファンタジーに通じるものであると記載されている (Wolf, E., 1988)。

このように自己心理学の観点からは、想像の仲間は自己対象の一つと見なされるわけで、自己が凝集して健康で適応的な営みを続けるために創作される、ごく自然な現象と言えるのである。友人や親密な同類との交わりを求める欲求が、現実の対象を見出すのではなく、想像の世界に対象を求めた現象である。この自己対象としての想像の仲間の理解は、先述した移行対象としての理解と類似した面があるように思われる。いずれも人は自己が剥き出しのまま全くの外的世界と出会うわけではなく、ほど良い緩衝領域が健康な場合には備わっていると見るところがある。そのおかげで、自己は大人になっても万能的な経験をいくらか持ち越すことが可能である。それが健康と適応の証であるとする点であろう。想像の仲間は確かに知覚された事実よりも創作された思考の優位、事実的現実よりも空想的想念の優位をもたらす面があり、ともすれば現実を回避した逃避的な試みと映る面がある。しかし移行対象や自己対象といった観点は、想像の仲間のような自己と外界との緩衝領域で生じる現象を健康で適応的なものと捉える態度が優勢である。

一方、先述したクライン派の精神分析学の考えでは、こうした緩衝領域の精神活動をもっとシビアに見る傾向が強い。つまり適応的な面よりも、逃避的防衛的、そして病理的な側面を重視する。外的現実としての対象との関係であるならば必然的に生じてくるであろうような葛藤

や軋轢、欲求不満体験を、想像の仲間との間では経験しなくてすむのなら、想像の仲間との関わりはこれらの体験を介して成長し発達する心のプロセスを阻害するものになる。したがっていずれは解消されて、現実の対象との関わりに身を置くべきであるとなる。想像の仲間とは克服されるべき自己愛的な産物と見なされる。このように精神分析学の中でも立場によって、想像の仲間の捉え方には相違があるものと思われる。確かに想像の仲間との関係は一般的には肯定的で、それによって取り組むべき課題を背負うような体験はあまり語られない。しかし想像された対象との関係には、葛藤や軋轢は生じないものなのであろうか。もしも想像の仲間との間にも葛藤や欲求不満が生じえるのなら、外的現実に取り組むのに比較しうる成長や発達の機会が想像の仲間との関係からも得られてくるのかもしれない。こうした点について、次に分析心理学の能動的想像という概念と想像の仲間との関係を考察する中でさらに検討してみたい。

(4) 能動的想像と想像の仲間

精神分析とならんで深層心理を扱う心理療法の立場に分析心理学（ユング心理学）がある。ユングの提唱した分析心理学もまた意識と無意識との力動的関係に着目する力動的心理学である。ところで分析心理学の技法の中に、想像の仲間との関わりにも相当する心の中での対話を意識的に試みる技法がある。能動的想像である。ここでは、この技法とその背景となる心についての理論を概説し、その観点から想像の仲間をどのように見なせるものか考察する。能動的想像とはユングによって提唱された、主として自己分析のための、そして個性化を促進するための技法である。ユングは子どものときに想像の仲間に似た体験を持っていたようだが、本格的に能動的想像に取り組むようになるのは、中年期に精神病様の体験に悩まされ、それに何とか立ち向かおうと格闘する中でであった。当時のユングは、強烈なインパクトを持つ夢や極めてリアルなビジョン等にしばしば見舞われたが、そうした現象を無意識の氾濫と捉え、それに取り組むために、ビジョンで出会う対象と対話を始めていく。こちらから語りかけ、それに応じて向こうの返答を聞き、さらに語りかける。このような対話を記録にとどめ、またビジョンを絵に描写したりする中で、ユングは無意識についての理解を深め、次第に心理的安定を取り戻していった。ここで出会う対象とは無意識の中でも普遍的無意識（個人的無意識とは対照的に万人に共通する無意識のより深い次元とされる）の元型の表現であることが多く、能動的想像はユングにとって無意識の理解に留まらず、自己の生きる意味や目的を明らかにする実存的体験でもあった。こうしたユング自身の体験を基に、次第にクライアントに対しても能動的想像を手ほどきし薦めるようになっていったのである。

能動的想像のようにイメージを重視する技法は心理療法には広く存在するし、それらは概して意識野に限定されない心の全体性を重んじて自己を捉え直す契機にしようとする点でも能動的想像と共通する。しかし能動的想像を他のイメージ技法と分かつ独自性があるとして、老松（2000）はそれを自我の能動性であるとしている。能動的想像は他のイメージ技法のようにイメージを受動的に受け留めたり、イメージが展開するままに任せるものではない。むしろ無意識から届くメッセージと向き合い、それに自我でもって答え無意識に投げ返していく。そうし

て自我と無意識とが拮抗しあう関係の中でダイナミックに展開する過程なのである。またその過程を仔細漏らさず書き留めるあるいは描写する観察自我の明晰さも要求される。したがって自我が弱体化している病態の者には能動的想像が困難であり、適応外とされる。このように自我の能動性、積極性が欠かせないわけであるが、それがあだになることもある。自我が勝ちすぎる場合である。無意識との対話というよりも、自我が勝手にファンタジーを作り上げてしまう。想像とファンタジーとの区別は時に曖昧にならざるを得ないが、自我による意識的な創作は、自我のための願望充足に終わるため、やっけても空虚で面白みが感じられなくて早々に放棄されることが多いと言う。

このような能動的想像という観点から想像の仲間体験を考えてみることもできるであろう。特に移行対象との比較で上述したように、想像の仲間の持つ他者性は、能動的想像で出会うとされる無意識界の対象のそれに近い。想像の仲間が極めてリアルに体験されるのも、自我がビジョンや聴覚的イメージを体験しているとして理解できるであろう。ところで、能動的想像には視覚法と聴覚法とがある。これまで述べてきた心の中に現れた他者との対話を重んじる方法は聴覚法に当たるが、視覚的なイメージが浮かんでくるのを待ち、そこに自己を投入していく視覚法から始められる場合も多いという。想像の仲間との関わりも、相手との対話を中心に展開していく関係のタイプと、想像の仲間の存在する空間までもリアルにイメージされてそこに入り込んでいく夢幻様のタイプとがあり、前者は聴覚法に後者は視覚法に対応しているように思われる。一方相違点としては、能動的想像で出会う対象は、普遍的無意識の層にある元型的対象が多いとされるが、想像の仲間は友人や同胞といった比較的身近で日常的な対象と位置づけられることが多い。能動的想像が無意識の深い層との対話と考えられているのに対し、想像の仲間は比較的意識に近い自我の理想や、分析心理学で言う影といった面を表しているからであろうか。幼児や児童の自我は成人の自我とは異なり、未だ堅固に確立されたものではなく、意識の周辺に様々な自我の代替物（コンプレックス）が存在していると思わせるのではないだろうか。それらが容易に想像の仲間として具象化され、自我と関わられることになるとして理解できなくもない。このように能動的想像という観点からすると、想像の仲間は未だ自我に統合されていない無意識的なパーソナリティの一面が人格化されたものと考えられるし、想像の仲間とのかかわりは無意識との対話であり、無意識の要素を自我が統合していく過程であると見なせるだろう。

先述したクライン派精神分析学において白昼夢と想像とを識別することが重要であったが、同様の区別が能動的想像においても重視されている。自我の意のままに空想されるファンタジーは自我を肥大させるだけで、無意識との交流は生じてこない。また能動的想像では強い倫理的態度が必要であるとフォン・フランツ von Franz, M.(1980) は述べている。無意識との真の対話にはただ傍観しているのと違い、強い情動的関与が求められる。ただ眺めているといった「偽りの自我」の態度には倫理的対決が含まれていないのである。また能動的想像で得られたものは実生活に反映されねばならない。実際に生きられない限り、無意識の自我への統合は為されようがないのである。このような自我の真剣さは、想像の仲間との関わりとは異質なも

のであろうか。想像の仲間との関わりはその多くが遊戯的で夢中になって楽しめるものである。しかし遊戯的であることが真剣でないという意味ではない。子供にとって遊ぶことはきわめて真剣な行為でもあろう。想像の仲間がリアルな存在感をもち、意識を捉えて離さないとき、子供は真剣に想像の仲間に関わるとも言えるだろう。したがって想像の仲間との関わりは、自然発生的に生じた子供の能動的想像である場合があろう。

5. まとめと今後の課題

本稿では想像の仲間と呼ばれる現象について、心についての深層心理学的理解からどのように捉えられるものか、考察を試みた。想像の仲間は幼児期から児童期にかけて少なからず見られる現象である。それは目に見えない作り出された対象であるという点で、人形やおもちゃといった実在物とは異なるけれど、想像の仲間に対して抱く感情やその関わりから得られる体験は、実在物との想像的体験である遊びと共通するところの多いものでもあった。ナゲラは想像の仲間が幼児の自我発達を促進することを幾つもの例を挙げて述べたが、想像の仲間そのものはまず第一に幼児の想像力の自然な発露として捉えられるのではなからうか。それは幼児の側にある関わりを持ちたいという動機によって触発され、ちょうどそれに見合う実在対象物がなければ創作される。もしもぬいぐるみや人形といった適当な実在物があれば、創作されるのではなく、見出され関わられるのかもしれない。このように関わりや対話を求めるニードこそ一次的なものではないだろうか。ウイニコットはほど良い養育環境にある子供は遊びという想像的活動を自然に始めていくと述べたが、それも関わりを求める傾向性を子供が本来的に備えているからではなからうか。精神分析学で対象希求性と呼ばれるものもこのあたりのことを指しているように思われる。しかし子供はその時々心理的な課題や葛藤をかかえざるを得ない。そして子供は遊びという想像的活動の中でそれらに取り組んでいく。想像の仲間もナゲラが挙げたように自我のニードのために役立てられていくのであろう。

想像の仲間を深層心理学の見地からどのように捉え得るのかについて本稿の後半で述べた。それは学派の違いによってそれぞれ異なる理解が導き出されるといったものであったが、いずれにせよ、単に意識的水準の動機で営まれる空想に過ぎないとは言い切れない面をもつと言える。その上で、内的対象関係の現われであったり、移行対象や自己対象の機能を果たすと見られたり、あるいは無意識との対話を促進し自我を豊かにするものと見ることも可能であると考察された。このような多様な見解が出てくるのは、そして想像の仲間現象が心の成長や発達に寄与するものか否かについての議論が生じるのは、深層心理学に多様な理論的見地があるからであるが、同時にまた想像の仲間現象が多岐に渡っているからでもなからうか。想像の仲間をひとまとめにして云々するには限界があり、個々人の想像の仲間現象、その体験をつぶさに観察していくことで、どのような見解が最も当てはまるのかを検討していくことこそ有意義であるように思われる。

ところで本稿で取り上げた深層心理学の諸概念は、本来治療場面の治療者と患者との間で生じてくる情動的関係を理解するための道具として生み出されたものである。すなわち、転移と

逆転移に関わる現象を深く理解し対処するために用いられるものである。つまり心理療法関係においては、治療者は客観的な外的現実の対象としてのみ扱われるのではなく、患者の内面世界のありように応じて様々に着色され歪曲されて認識され扱われる。言い換えれば、治療場面の人間関係とは極めて想像的な関係なのである。治療はむしろ、これを活用して患者の内的世界を理解し、その修正に取り組もうとする。想像の仲間は、こうした転移という現象が生じる原点、現実の対象に投影される以前の転移の原基とも言えるかもしれない。

本稿では想像の仲間を従来からの理解にならって当人にとって肯定的な体験となるものに限定して論じてきたが、当人にとって否定的であったり病的・防衛的な意味を持つ想像上の対象をいくらかでも取り上げることができるだろう。臨床場面ではむしろこちらと出遭うことが日常なのである。妄想幻覚的体験、人格の解離や多重人格、空想虚言といった病理的現象と想像の仲間との関係をどのように考えるのかといった問題には本稿では一切触れずにきた。今後の課題としたい。

文献

- Adamo, S. M. G. (2004) An adolescent and his imaginary companions: from quasi-delusional constructs to creative imagination. *Journal of Child Psychotherapy*, 30, 3, 275-295.
- 麻生武 (1989) 想像の遊び友達～その多様性と現実性 相愛女子短期大学研究論集 Vol. 36, 3-32.
- 麻生武 (1991) 内なる他者との対話 無藤隆(編) 言葉が誕生するとき 第一章 新曜社 pp. 39-91.
- 麻生武 (1996) ファンタジーと現実 金子書房
- Bach, S. (1971) Notes on some imaginary companions. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 26, 159-171.
- Benson, R. M. & Pryor, D. B. (1973) When friends fall out. Developmental interference with the function of some imaginary companion. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 21, 457-468.
- Benson, R. M. (1980) Narcissistic guardians, developmental aspects of transitional objects, imaginary companions and career fantasies. *Adolescent Psychiatry*, 8, 253-264.
- Fraiberg, S. (1959) *The Magic Years*. New York: Scribners.
- Freud, A. (1936) *The Ego and the Mechanisms of Defense*. New York: International University Press. (「自我と防衛」外林大作訳 誠信書房)
- Hurlock, E. B. & Burnstein, W. (1932) The imaginary playmate; the questionnaire study. *Journal of genetic psychology*, 41, 380-392.
- Isaacs, S. (1948) The Nature and Function of Phantasy. *International Journal of Psychoanalysis*, 29, 73-97. (空想の性質と機能 松木邦裕編・監訳「対象関係論の基礎」新曜社 2003)
- 石谷真一 (2004) 現実感覚に関する一考察 神戸女学院大学論集 第51巻2号 195-207.
- Manosevitz, M., Prentice, N. M. & Wilson, F. (1973) Individual and family correlates of imaginary companions in preschool children. *Developmental Psychology*, 8, 1, 72-79.
- Manosevitz, M., Fling, S. & Prentice, N. M. (1977) Imaginary companions in young children: relationship with intelligence, creativity and waiting ability. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 18, 73-78.
- Nagera, H. (1969) The imaginary companion: its significance for Ego development and conflict solution. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 24, 165-196.
- 老松克博 (2000) アクティブ・イマジネーション 誠信書房
- 大塚峰子・佐藤至子・和田香誉 (1991) 想像上の仲間に関する調査研究 児童青年精神医学とその近接領域 32, (1) 32-48.

- Segal, H.(1991) *Dream, phantasy and art*. Routledge, London. (「夢・幻想・芸術」新宮一成他訳 金剛出版 1994)
- Singer, D. G. & Singer, J. L.(1990) *The House of Make-Believe*. Harvard University Press. (「遊びがひらく想像力」高橋・無藤・戸田・新谷訳 新曜社 1997)
- Spiegelman, J. M.(1985) *The Nymphomaniac*. Falcon press. (「能動的想像」町沢静夫訳 創元社 1994)
- Svendsen, M.(1934) Children's imaginary companions. *Archives of Neuology and Psychiatry*, 32. 985-999.
- Taylor, M.(1999) *Imaginary Companions and the Children Who Create Them*. Oxford University Press.
- Von Frantz, M. L.(1980) "On Active imagination" in Ian F. Baker(Ed.) *Method of Analytical Psychology, Papers from the Seventh International Congress of Analytical Psychology in Roma*, Fellbach: Verlag Adolf Bonz, pp. 88-99
- Winnicott, D. W.(1971) *Playing and Reality*. Tavistock Publication Ltd., London. (「遊ぶことと現実」橋本雅雄訳 岩崎学術出版社 1979)
- Wolf, E. S.(1988) *Treating the Self: Elements of Clinical Self Psychology*. The Guilford Press. (「自己心理学入門」安村直己・角田豊訳 金剛出版 2001)

(原稿受理 2005年9月26日)